



ブナ林を巡る旅

上信越 高倉山

年が明けてから、体調を崩したり予定が合わなかったりと、中々活動に参加する事が出来ていなかったが、今回ようやく山に行くことができ、美しいブナ林を堪能する事が出来た。

2月9日(土) : 曇り/雪

「雪が桜のように舞っているね！」

早朝の中央線に乗り込み、眠気にやられてぼんやりしていたが、その声にハッとして思わず目を大きく開けた。驚いたのは、雪が降っていたからではなく、その声があまりにも幼かったからだ。母親と共に窓の外を見ていた少年は、まだ本当に小さかった。「初雪だよ！」顔を窓にぺったりとくっつけ、嬉しそうな声をあげている。外はまだ薄暗く、少年の興奮した息遣いが窓を白く曇らせる。

今日は東京でも雪が降るらしい。それもこの冬一番とも言われる寒波がやってきているという。ニュースでそう聞いていて、雪が降ると面倒だな、などとどこか冷めた気持ちでいた。昔は雪が降ると、積もらないかなと家のベランダから外を眺めワクワクしていたものだが、どうやらいつの間にかそういう楽しみを失ってしまったらしい。そう言う事を素直に楽しめなくなってしまった自分を、なんだか寂しく思う一方、楽しさに溢れ目を輝かせている少年にちょっとした嫉妬を覚えた。

新幹線と在来線を使い継いで、六日町駅へと向かう。新幹線の車内はスノーボードに向かう人達で溢れかえっていて、登山の格好をした人は我々を含めて数える程だった。越後湯沢駅で、乗り換える電車を間違えるというトラブルもあったが、無事、前泊していた栗原さんと六日町駅で集合し、タクシーで野中方面へと向かった。天気は曇りながらも雪は降っておらず、気温も高い。東京よりも暖かいのではないかと思うくらいだ。

高倉山の麓にある小川の集落に到着し、登る準備を始める。取り付きの地点から既になかなか深そうな雪で、皆スノーシューを付け(飯島さんはワカン)、建物の横から山へと入っていく。少し歩くと、大きな堰堤が見え、それを越えるようにして右の尾根へと取り付く。上を見ると、山に張り付くようにして杉林が広がっていた。動物のトレース(ウサギだろうか?)が杉林の間を縫うように続いている。ついついそちらに引き込まれそうになってしまうが、軌道修正をしながら登る。さらに歩くと、杉林からブナ林へと変わっていき、様相が少しずつ変わってくる。時々、垂り雪が宙を舞う。

その後もどんどん進んでいき、ブナ林の背も少し低くなってきた。850mあたりの台地となっている場所をテン場とする事にし、そこに荷物をデポしてから頂上へと向かう。しばらく進むと急登があり、それを超えると稜線へ出た。薄雲に太陽の輪郭が覗いていたが、視界はあまり良くなく、周りの景色は霞んでいた。右へ進むと、フタコブラクダの背のようになっている頂上直下の登りで、左側に少し雪庇が出ている部分があったので、アイゼンを装着し栗原さんがトップで進む。我々も

【日程】

2019年2月9日(土)～
10日(日)

【メンバー】

栗原(L)、佐藤り、飯島、
杉本

【地形図】

六日町

【記】杉本

それに続き、難なく突破した。頂上にて集合写真を撮り、一息つく。少しだけ視界が晴れ、薄っすらと見える山々の輪郭とブナ林は、水墨画のようで風情があった。「この景色は快晴よりもいいかもしれませぬ」と飯島さんが嬉しそうに言う。

テン場に帰り、荷物をまとめてテントに入ると早速宴会が始まった。飯島さんの故郷・島根の酒「王祿」で乾杯。するりと身体に入っていく、美味い。乾き物をつまみつつ、お酒をチビチビとやる。さて、夕食の準備にとりかかろうとしたところで、「あれ？飯島くん、大コッヘルは？」と佐藤さん、栗原さんが声を揃えた。すると飯島さんは、まるで当然の事のように「大コッヘル？中と小しか持って来てないですよ。なんせ大は嵩張りますからね」と言った。佐藤さんと栗原さんが「えー！」と、やや仰け反る。夕食は鍋だったので、中コッヘルで少量ずつ作って食べるという方法にし、特に問題はなかったが、佐藤さんはその後、「中コッヘルの飯島」と言って何度も笑っていた。飯島さんはやや不服そうな顔をしていたが、そういう異名を持っている事が、なんだか少し羨ましい。宴会は和やかな雰囲気の中で終了し、9時頃には全員シュラフの中に潜り込んだ。外では、ブナ林のささやきのような雪が降り続けている。



高倉山山頂直下

2月10日（日）：曇り/雪

朝、準備を済ませてテントを出ると、まだ外は薄暗く、細かい雪が舞っていた。雪灯りでぼんやりと青白く輝きながら、ブナ林が奥へと続いている。その静けさと、何か独特の光を纏うこの風景は、生命を持った静止画のようである。「幽玄」という言葉がこれほどまでにしっくりとくる風景も、そうはないのではないかと思う。ずっと眺めていると、木々の奥深くに吸い込まれていきそうな気がした。

テン場を離れて、来た道に戻ろうとすると、行きのトレースは完全に消えていた。やはり夜中にかなりの雪が降ったようだ。早く降ろうと、勢いをつけて歩いていると、佐藤さんに上から呼び止められた。どうやら途中で別の尾根に引っ張られてしまったようだ。少し登り返して、元の尾根に戻る。こういう場所は特に気をつけなければいけない。再度下り始めると、斜面も中々急で、新しい雪の下にやや硬いクラスト部分がある為、かなり滑る。スノーシューだと少し危なそうだったので、取り外しツボ足で降りることにした。栗原さんがどんどん降っていき、その後をついて行く。

ブナ林を抜けて、杉林まで戻ってくると、行きにも見た大きな堰堤が見えた。前を歩く栗原さんと飯島さんの後を踏んでいるにも関わらず、一步進むたびに、膝までズボリ踏み抜き、その度に消耗し力が抜けてしまう。あと少しだからアイゼンを出すのは面倒だなと思いながら歩いていたが、登山口までは意外に距離があり遠かった。山を降りる頃には下りとは思えない程、汗だくになり、面倒臭くてもスノーシューを履けば良かったと少し後悔した。

山は降りたが、下でもまだ雪が降っていた。タクシーを待つ間、屋根を借りようと、民家の隣で犬と遊ぶ青年に声をかけると、どうやらそのお家の方のようだった。そしてご家族の方に話をしてくれて、タクシーが来るまで、と車庫と作業部屋を解放してくれて、蜜柑など食べ物まで頂いてしまった。感謝。

タクシーで六日町の駅まで戻ると、荷物を置いてそのまま温泉へと向かった。二日間の垢を落とし、湯船に入る。お湯の熱さに一瞬驚いたが、じわじわと腹の底から声にならない声が出て来た。熱い湯に浸かりながら、今回の山行を振り返る。派手さはないが繊細で美しいブナ林と愉快的な宴会、そしてこの熱い温泉。それから、行きの電車で見たあの少年の事を思い出す。この楽しみは、あの小さい少年にはまだ分かるまい。大人になってから分かる事もあるもんだ、失う事ばかりではないのだ、自分を納得させるように心の中でそう呟いた。



ブナ林に行く

【行程】

1 日目：野中(9:00)～C1 デポ (13:00) ～高倉山山頂(14:20)～C1 (15:10)

2 日目：出発(7:00)～野中(9:30)